

での各医院での輪番制の休日歯科当番を廃して、歯科医師会館内に救急歯科センター（以降「センター」と略す）を設立した。以来、毎回歯科医師会会員2名（年末年始は3名）が交代で担当し、休日救急診療を続けている。

センターの毎年の実診療日数は71日前後、受診者は1,700名前後で推移しているが、これまで小児の受診実態についての調査が行われたことはなかった。

今回、センター保管のカルテを、歯科医師会理事会の承諾を得て調査・分析したので、外傷を中心とした結果を報告する。

【調査対象および調査方法】 センターに保管されている、平成21年1月1日から平成25年12月31日までの5年間に受診した全患者8,396名分のカルテを、判読・分析ともに一名で行ない、個人情報に配慮した。

【結果】

1. 15歳未満の小児の来所状況

5年間の15歳未満の小児（以降「小児」と略す）の来所者は計981名であり、全来所者の12%を占めた。

2. 小児の主訴

5年間の小児の主訴は、う蝕由来が445名（45%）、外傷が350名（36%）、その他（萌出痛、口内炎、交換期の障害など）が186名（19%）だった。

3. 外傷主訴小児の分析

- ①外傷の種別では、歯の打撲215名、軟組織損傷53名、歯の破折49名、脱臼・亜脱臼15名、脱落11名、陥入・埋入2名、その他5名（中心結節破折を含む）だった。
- ②外傷小児の年齢を更に5歳毎に細分化して分析すると、0～5歳未満が186名（53%）、5～10歳未満が109名（31%）、10～15歳未満が55名（16%）だった。
- ③低年齢外傷小児で「かかりつけ歯科医」のある者は、0～5歳未満では68名（37%）更に、0～3歳未満に絞ると、99名中16名（16%）と少なかった。
- ④担当医によって、カルテ・記録の著しい差が見られた。

【考察】 明らかになった問題点を改善する必要がある。

P-13 歯と口の健康週間活動報告：咀嚼に関する啓発運動

（朝日大・歯・小児歯）

岡野 哲・大西 見佳・小倉 英稔
村林 知香・若松 紀子・近藤 亜子
長谷川信乃・飯沼 光生・田村 康夫

【目的】 本学では毎年6月に「歯と口の健康週間」にあわせて附属病院において啓発活動を行っている。平成26年度は小児歯科学講座が担当で「健康な歯でよく噛もう！」をスローガンに、会場にはお口の相談コーナーを設け、参加者に対し咀嚼力判定とアンケート調査をともに行った。その結果について報告する。

【対象】 平成26年6月2日～7日に朝日大学歯学部附属病院および朝日大学附属村上記念病院にブースを設け、立ち寄った被検者のうち咀嚼力判定に興味を示した240名を対象とした。なお、本調査は本学倫理委員会から承認を得て行った。

【方法】 被検者に対し、年代、性別、昼食時の食事時間、義歯の使用の有無、よく噛んでいるかどうか、および残存歯数を聞き取り調査した。次いで、キシリトールガム「咀嚼力判定用」（ロッテ社製）を2分間（義歯装着者は3分間）咀嚼させた。その後、ガムをビニール袋に吐き出させ、判定用のカラーチャートと比較し7段階で咀嚼力の判定を行った。

【結果および考察】 年代は60代以上が65%、性別では女性が61%であった。これは調査が平日の昼間に多く行われたことから若年者が少なかったと考えられる。また昼食時間は被検者の45%が10～19分と回答し、最も多かった。

咀嚼力判定ガムの判定結果は、7段階のうち一番よく咀嚼していた「7」を示したのは40%、「6」は48%であった。この結果は義歯の使用の有無にかかわらず同様の高い判定結果を示したことから、義歯が適切に管理されていることが推察された。また10歳未満においては他の年代に比べ結果にバラツキがみられた。これは、交換期等で噛みにくい状態であることが考えられた。

調査後には「よく噛むことの効用」を紹介したパンフレットを判定結果とともに渡し、咀嚼の大切さを伝えた。特にメタボリック症候群や認知症の予防に効果があることに関心を示した方が多かった。